２．音楽

〈第 61 回例会〉

創立 25 周年記念コンサートを終えて

安藤むつみ

北大学長をされた初代・今村成和会長と、その前年にポーランド文化功労勲章を受章されたピアニストの遠藤道子副会長のもと、1987 年に設立された当協会の創立 25 周年記念コンサートを、2012 年5月 12 日土曜日の午後、新緑鮮やかな中島公園内の札幌コンサートホール *Kitara* 小ホールにおいて開催することができました。

これまでにも遠藤先生を中心に創立3周年、10 周年の大きなコンサートが、そして近年は三浦洋さんの解説によるショパンのサロンコンサートなどが会員の演奏によって開催されてきましたが、5年前の創立 20 周年記念ピアノコンサートからこれまで、毎年ほぼ同じ規模での演奏会を皆様に助けられながら続けてこられましたことは、当協会が音楽関係の団体ではないことを思うと、ほかにはあまり例のないことではないかと思われます。こうして5年間休まずに演奏会を続けてきたことにより、当協会の存在やポーランドという国への興味、またポーランドとショパンの関係などが何人かの人たちにでも知られることになったとしたら、それはたいへん意義のあるとても嬉しいことだったと思います。

今回の演奏会は、できるだけ多くの方に会場に足をお運びいただき楽しんでいただけるようにという思いから、みんながよく知っているけれど演奏会ではほとんど弾かれる機会のない「乙女の祈り」から始まって、何といっても多くの人が大好きなショパンの名曲、またほかではあまり聴くことのできないポーランド語による歌曲やピアノ曲、ポーランド人によるポーランド語の詩の朗読、そして最後に迫力のある2台のピアノ曲というプログラムにより、それぞれが精いっぱい心を込めて演奏いたしました。

残念ながら、入場者数は5年前の 20 周年コンサートよりはかなり少ないものでしたが、それでも「良いプログラムで楽しめたよ」「ポーランド語の歌が聴けて良かった」「朗読がとてもよかった」「やっぱりショパンの作品って別格だね」「2台のピアノが美しかった」などのお声をいただくと、これからも、よりポーランド文化協会の名にふさわしい演奏会が続いていって欲しいと思う気持ちになります。

それには、演奏会を一般向けの協会主催のものとして今後も続けていくのであるなら、事務局をはじめとして出演者だけでなくいろんな方面からもっと情報なりアイディアなりを出し合っていく必要があるかと思います。幸いなことに、現在は、佐光事務局長の尽力により今まで以上に大使館との親しいつながりもできて、昨年のコンサートに駐日ポーランド大使館のドミニカ・ヤキモヴィチ=ブウァシュチク領事がおいでくださったのに続き、今回もポーランド広報文化センターのマルタ・カルシ次長においでいただき、ステージでのご挨拶という美しい大きな「お花」をいただきました。またとても強力な会員も増えましたので、出演者も勉強する機会を得ながらポ文協独自の素敵なコンサートに今後ますます発展していけることを願っています。

今回は一週間前に映画会もあって、運営委員の皆様には大変ご負担をおかけいたしました。その上で演奏会当日は早い時間から受付などの仕事をしてくださった方々、それから会場に足をお運びいただき演奏を聴いてくださった会員の皆様お一人お一人に心から御礼を申し上げます。

終演後のレセプション。テラスレストラン *Kitara* にて、前列右3人目マルタ次長

5月の札幌の市電に乗って ～詩の朗読～

シルヴィア・マリア・オレヤージュ

2012 年5月 12 日、*Kitara* で北海道ポーランド文化協会創立 25 周年を記念したピアノコンサートが開催されました。マルチン・ヤンチャレクと私は、このような記念すべきイベントに招待され、ポーランド人作家の著名な詩を聴衆の前で朗読するという名誉に与りました。マルチンは、ユリアン・トゥヴィムの**「鳥のラジオ」**を朗読しました。この詩では、鳥の鳴き声をまねた多くのオノマトペ（擬音語：トゥトゥトゥ、プロプロプロ、ピョピョピョなど）が目立ちました。

私が朗読した詩についても少し紹介したいと思います。最初の詩はユリアン・トゥヴィムの**「評論家へ」**、二番目の詩はコンスタンティ・イルデフォンス・ガウチンスキの**「トマトソースのサバ」**でした。

「評論家へ」は、単調な人生、ちょっとした事への喜びと、活力を表現しています。この詩は、一見単調に見えるワルシャワの市電を思い出させます。私が最初に札幌の市電に乗った時もそうでした。同じ軌道を周期的に走る…、でもそこには多くの発見がありました。なんて興味深い体験でしょう！

第二の詩は、私の最も好きな詩の一つです。今回のコンサートが開かれた5月 12 日は、ガウチンスキの詩の題材となった、ユゼフ・ピウスツキ将軍による 1926 年5月のワルシャワ・クーデター勃発の日にあたります。「トマトソースのサバ」とは何を意味しているかご存知ですか？ガウチンスキの詩は 1926 年のクーデターから 10 年後に書かれました。彼は詩の中でポーランドの国政に対する深い憂慮を表現しています。「サバ」のラベルが貼られた缶を示している「トマトソースのサバ」は、詩の中にさほど意味の無いフレーズとして再三出てきますが、このフレーズは空き缶の中から出ることのできない存在、つまり当時の政治家たちを風刺したものです。同時に、言葉を超えた非言語的空間を表そうとしています。繰り返される「トマトソースのサバ」には、疑念、後悔、失望、落胆、呪いなど、多くの感情が表現されているのです。

ポーランドの詩は奥が深いですね。このような興味深い詩を朗読する機会を与えてくださった、北海道ポーランド文化協会、特に佐光さんには大変お世話になりました。ここにお礼申し上げます。

＊ 朗読された詩3点はすべて、佐光伸一さんにより日本語に翻訳され、プログラムと共に配布されました。

〈第 47 回例会〉

盛況だった第2回美術館コンサート

さる 2004 年5月1日に北海道立近代美術館エントランスホールで、美術館と本協会共催の2回目のピアノコンサートが開催されました。「フランス時代のショパンとその作品」と題して、三浦洋さんがフランス時代のショパンのエピソードを紹介し、会員の小林美保さん、片寄ますみさん、ウィリアムス美由紀さんがショパンの名曲 12 曲を演奏して、集まった大勢の聴衆は熱心に聴き入りました。

当日は、会員でピアニストの遠藤郁子さんも飛び入り参加し、映画「戦場のピアニスト」で話題となったショパンの遺作のノクターンを弾いて盛んな拍手を受けました。天気のよい土曜日の午後であったことも幸いして、盛況でした。

美術館コンサート：演奏ウィリアムス美由紀さん

創立 20 周年記念ピアノコンサートは大成功

創立 20 周年記念ピアノコンサートの出演者たち

2008 年5月 17 日、北海道ポーランド文化協会創立 20 周年を記念しピアノコンサートを札幌コンサートホール *Kitara* 小ホールにて開催しました。

コンサートは「ショパンからバツェヴィチまで」と題し、フレデリック・ショパン、モーリッツ・モシュコフスキ、カロル・シマノフスキ、アレクサンデル・タンスマン、グラジナ・バツェヴィチというポーランドの５人の作曲家を取り上げ、当協会の会員を中心に 14 名のピアニストが演奏するとともに、アダム・ミツキェヴィチ、ツィプリアン・ノルヴィトという 19 世紀ポーランドを代表する詩人によるショパンゆかりの詩2編を、札幌在住のポーランド人ディバワご夫妻が朗読しました。当日は2階席までたくさんのお客様をお迎えし、コンサートは大成功でした。

記念コンサートを成功裡に終えて

薄井　豊美

創立20周年記念コンサートの準備は、演奏会実行委員会を設けて昨年まだ雪深い頃に始まりました。音楽関係の会員の皆様が出演を御快諾下さり、準備は順調に運びました。薫風爽やかな5月 17 日、多数のお客様をお迎えした本番は、真摯な熱演が続き、ポーランド詩の朗読の際、同時通訳が欲しかったとの御意見を頂き反省点となりましたが、充実した良い演奏会になりました。

これも偏に佐光事務局長はじめ、御関係の皆々様のお力添えの賜物です。本当に有難うございました。この度の演奏会を機会に、定期的な演奏会開催を模索しています。今後共変わらぬ御協力を宜しくお願い申し上げます。

（うすい・とよみ　演奏会実行委員）

「ショパン生誕 200 年記念」コンサートを終えて

ウィリアムス　美由紀

2010 年6月 18 日、札幌サンプラザホールにおいて協会主催の恒例のコンサートが開催されました。今年は、ポーランド生まれの作曲家ショパンの生誕 200 年の記念の年ということで、第一部はピアノソロ

によるショパンの名曲をお届けしました。第二部では、ポーランド出身の作曲家のみならず、ポーランドにゆかりのあるバラエティに富んださまざまな作品をピアノデュオで聴いていただきました。第三部では、長内勲先生指揮による男声合唱団「ススキーノ」の皆さんが、ポーランド国歌をはじめとするポーランドの歌曲をはじめ盛りだくさんの曲を披露し、コンサートを盛り上げてくださいました。お客様もたいへん多く、大きな会場がほぼ満席の盛会でした。

ポーランド出身の作曲家といえばショパンがあまりにも有名で、なかなかその他の作曲家にはスポットライトが当たることがありませんし、実は選曲もなかなか難しいところがあるのです。それでも、少しずつ、まだあまり知られていない作曲家の作品を、このようなコンサートでご紹介できることは大変有意義なことかと思います。ご協力頂いた関係者各位に心よりお礼申し上げます。

札幌におけるポーランドの文化を感じた日

ヴァルデマール・ヤロスラフ・ダブロフスキ

2010年6月18日、北海道ポーランド文化協会主催の毎年の音楽コンサートが札幌サンプラザホールで開催された。後援は駐日ポーランド共和国大使館や札幌市をはじめ日本ショパン協会北海道支部など多数。今回はこのコンサートに歴史上初めて男性合唱団「ススキーノ」が出演した。

男性合唱団「ススキーノ」とは

後列中央で歌う筆者

在札幌ポーランド人である私は「ススキーノ」のメンバーのひとりである。この男性合唱団は6年前に設立され、当初は11人のメンバーで活動を始めたが、現在、在籍者リストには24歳から73歳までの71名の名前が掲載されている。ほとんどが楽譜すら読めないこのアマチュアグループの指揮をとるのは、年齢は67歳だが、まるでティーンエイジャーのようなエネルギーをもった、北海道教育大学岩見沢校名誉教授の長内勲氏である。

「ススキーノ」は北海道で最大の男性合唱団であり、日本全国でも、もっとも大きなもののひとつである。アマチュアの合唱団なので、指揮者とピアニストを除き、出演料は受け取らない。今回は、在京のポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィチ氏がポーランド共和国大使館文化部の予算から費用の一部を援助することを個人的に許可してくださった。

コンサートのプログラムでは、ショパン以外にもほかのポーランドや、外国の作曲家の曲も聴くことができた。「ススキーノ」はポーランドと、日本の作品を混ぜて歌い、自分たちの出演の最初と最後にポーランド国歌「ドンブロフスキのマズルカ」（本書 87 ページ参照）を2度演奏した。その合間には、ポーランド民謡「森へいきましょう」[1]や、ポーランドに関する日本の古い軍歌「波蘭懐古」[2]のほか、日本の曲をたくさん歌った。日本の曲は大部分が札幌と北海道に関連したものだった。

困難を極めた練習

このコーラスで、コンサートの準備は 2009 年末に始まった。その時、コーラスの指導部は6月のコンサートへの招待を受け入れることを会議で正式に決定したのだった。合唱団は、このコンサートでポーランド協会のピアニストたちの素晴らしい演奏の後に出演することになった。

～ 初めてのポーランド語 ～

このコンサートはショパン生誕200周年記念だったので、私がその準備にあたった。というのも合唱団はほとんどいつも日本人の観客の前に立ってきたので、これまで一度もポーランド語の作品をレパートリーに入れたことがなかったからである。

～ なかなか届かない楽譜 ～

さらに楽譜を手に入れ、言葉の問題を克服することはとても困難であることが明らかになった。ポーランド語は、発音の点では現存する言語の中でもっとも難しいもののひとつであり、日本人の大部分にとって学習するのはもちろん容易ではない。

楽譜の入手は、ポーランド大使館の文化部も少しは援助してくれたが、それでもこれだけテクノロジーの発達した時代に3ヵ月以上もかかり、最後にはロドヴィチ大使も全面的に協力してくださった。楽譜がコーラスの指導部に届いたのは、ようやく2010

年の3月末のことだった。

「ススキーノ」は毎年5月に北海道銀行主催のチャリティコンサートに参加しているため、札幌のポーランド文化の日のコンサートの準備は、このチャリティコンサートの後にようやく始まった。ポーランド語の3曲のメロディを覚え、しかるべき発音を習うためにコンサートのメンバーに残されていたのは、たった5回の練習のみだった。

長内勲氏指揮、男性合唱団「ススキーノ」

～ そして発音 ～

「ススキーノ」の中ではポーランド語を話せる唯一のメンバーだった私は、この重要な問題に対処することを余儀なくされた。「ススキーノ」の団員の平均年齢は 60 代なので、この企ては容易ではない課題だった。出演に関するこれらすべての問題にもかかわらず、合唱団員は「イェシュチェ」「デシュチュ」「ズ・ジェーミ」といった言葉に舌を噛みながらもストイックな落ち着きをもって臨み、最終的にはオリジナルの発音に近い音を出せるまでになったのだった。

◆ プログラム・ノートから ◆

[1] **「森へいきましょう」**原題は「娘さんが森へ行った」ということから、日本ではレクリエーション・ソング調に作詞されたもので、その内容は原詩のハンサムな狩人に対するたあいのない愛の歌とはおよそかかわりがない。原曲は、ポーランドで“マゾフシェ”とならび民族合唱舞踊団の双璧とされる“シュロンスク”の十八番（おはこ）で、その地方の民謡と思われるが、今ではポーランド全国で愛唱されている。日本でもよく知られ、歌われている曲ではあるが、もとはポーランド民謡である。

[2] **「波蘭懐古」**（ポーランドかいこ）明治 26（1893）年発表。在ドイツ公使館付武官・福島安正陸軍少佐が日本へ帰国の際、馬でドイツのベルリンから、ポーランドのワルシャワ、モスクワ、ウラル山脈越え、シベリア、蒙古、北満州を経てウラジオストックに至った1年4ヵ月間（1892.2-1893.6）の単騎行を題材にして、国文学者の落合直文が作詞した長篇詩の内の、ポーランドの部分をとった作品。作曲者は不明。

写真：富山 信夫

「第 16 回ショパン国際ピアノコンクール」第3次予選を鑑賞して

水田 香

ショパン生誕 200 年祭で世界中が盛り上がる昨 2010 年 10 月、「第 16 回ショパン国際ピアノコンクール」鑑賞のため出かけることになりました。きっかけは友人同士の冗談、行く？行かない？の会話に始まり、「生誕 200 年の今年、ショパン博物館が新しくなりました！」のニュースに、「行くのは今」と思い立った次第です。

雪でも降りそうな寒さの中、古都クラクフで手に入れ羽織ったショール、その民俗衣装風な濃い青の縁取りを見ながら今でも心に思うのは、「歴史の偶然性」と「世界を身近に」感じた事実です。短いながらショパンの故郷ポーランドに滞在中に感じた事、コンクールの第3次予選（10 月 13–15 日）20 名の演奏を聴いた印象をお話ししてみましょう。

ショパンの資料が充実

ポーランド到着の翌日、ショパンの生家や洗礼を受けた教会、彼の文化性を育てたワルシャワの街、そして新しく整備された**ショパン博物館**を訪ねました。

今まで国内に散在していた資料や楽譜を1か所に集めて保管、専門的な研究資料を提供する一方で、一般市民への普及活動にも努めています。貴重な資料は時代別にコーナーに区切って最新式の電子ブックを使って展示、引き出しを開けると収納の楽譜通りに音が流れる電子機器も備え、シ

ョパンの音楽を容易に体感できる仕組みになっています。「小学生向き」の特設コーナーには、ショパンの生涯が分かり易く（視覚的に）展示され、引率者と小学生の集団が入れ替わり立ち替わり見学、若い人への教育に余念がありません。ポーランドの取り組みの熱心さに感心したものです。

歴史の偶然性を感じる

ワルシャワやその近郊の気候は道央そのもので、親しみのある木々や植物に囲まれた広大な公園の一角に**生家**があります。新しく整備された屋内には当時の暮らし振りが美しく再現され、庭にオープン可能な部屋は演奏会を開くことができる設えになっています。周辺は今なお緑豊かな農村地帯で、ワルシャワからバスで 40 分以上もかかります。

もしもショパンの父親がワルシャワの貴族の館で教育の仕事に就かず、息子がこの農村地域で少年時代をずっと過ごしたなら、伝記に語られる様な少年時代――ピアノを弾いては即興的に曲を生み出し、外国から来たオペラを見ては感激してピアノ作品に取り入れる――事は起こらなかったでしょう。他の作曲家、例えばモーツァルトやベートーヴェンには強烈な面――どの様な環境にあっても作曲活動を続ける――を感じますが、ショパンの場合、ピアノとワルシャワとの出会いが無ければ、恐らく多くの作品を残さなかったでしょう。またウィーンへの演奏旅行が一転して亡命生活に変わる事が無く、あの時再びポーランドに戻って平凡に暮らしたなら、「バラード」「ソナタ」「マズルカ」等の複雑な心情を語る作品は書かなかったと思うのです。当然、現代において世界中が注目する「ショパン国際ピアノコンクール」も生まれなかったという事になります…。

世界が身近になった瞬間

［会場］日頃オーケストラの演奏会が行われるワルシャワ・フィルハーモニアホールは街の中心地、ビル街の仲通りにあり、見つけるには少々苦労ですが、玄関前に掲げられた国旗が国際的な雰囲気を盛り上げています。「背の高い黒い鉄柵や大理石で作られた重々しい階段、とても格調高いホール…」。しかし、その玄関前では、気取らない格好の係員が、毎日段ボールからコンクールのニュース速報（演奏批評とカラー写真入り）と演奏 CD を取り出しては誰にでも無料配布する、その拘り（こだわり）の無いフリーな発想に、とても感心しました。

フィルハーモニアホール
前で筆者（右２人目）

［舞台］左右一杯に大きな赤い花が形作られ、その手前に白く大きな文字 *Chopin* が掲げられています。多分ショパン自筆サインの拡大でしょう。舞台に彩と晴れがましさとを添えています。演奏開始直前に演奏者の名前、プログラム、演奏者自らが選んだピアノの機種がアナウンスされます。客席のどこからも演奏者が身近に感じられる舞台の高さで、コンクールという事を忘れさせる雰囲気です。今回からイタリアのピアノ「ファツィオリ」が使用機種に入りました。ピアノ自体が歌っているような美しい響きを感じます。

［観客］会場は毎日、午前と午後で客席を入れ替え、会場内には常に日本人が多く、ロシア人の演奏の時には先生風の集団が現れ、ポーランド人の演奏時間帯にはドレスアップをした観客が多くなり、大きな拍手と声援で演奏者を盛り上げました。

［審査員の様子と観客］第3次予選初日、我々の席は2階審査員席のすぐ右手。審査員団入場の途端、それまでの疲労の大きさが手に取るように分かりました。それを労わるかの様にテーブルにはチューリップでしょうか、黄色の花束が美しく飾られています。世界の名演奏家、名教師であるヤン・エキエル、アルゲリッチ、ハラシェヴィッチらに加え、アジアからダン・タイソン、フー・ツォン、日本の小山実稚恵氏も参加していて、とても親近感を持ちました。

［コンクールの演奏］第3次予選では約1時間の課題を休憩を取ることなく弾き続けます。「ソナタ」と「幻想ポロネーズ」を含め、事前申請曲目中、まだ演奏していない作品を組み合わせるため、「マズルカ」「ポロネーズ」「バラード」「スケルツォ」「エチュード」「プレリュード」など、多様なプログラムが楽しめます。「日本人の第2次予選通過者は0」とのニュースを当地で知り、皆…、しかし、その分、各国の演奏者を冷静に観察することができました。

ロシア勢の演奏は共通して音楽の構成とテクニックが強固で、それに均整のとれた音楽性と各々の個性が加わります。ポーランド男性2名の演奏は控え目ながら、1つの音、1つの休符にもショパンに対する思い入れの深さが感じられ、イタリア人のショパンには歌心が溢れています。「ソナタ」2曲と「幻想ポロネーズ」を並べた強靭なテクニシャンのアメリカ人女性、大変にエレガントで洒落たショパンを披露したフランス人も…。東洋系の人は和声感が希薄ながら集

中力抜群で、複旋律の多層構造を面白く表現。

この様に各国の期待を背負う若手ピアニスト達が「世界の頂点に通じる扉を必死で開こうとしている」真剣な姿をリアルタイムで見ることで、世界との距離感が一気に縮まり、最後にはどの国のピアニストも応援したいと思う経験をしたのです。

［結果発表］第3次予選通過者（本選で協奏曲を演奏）の発表を待つ間、終始笑顔でプレスの質問に答え市民のサインに応じるロシア人達は自信に溢れ、今回優勝のユリアンナさん(Yulianna Avdeeva)も例外ではありませんでした。結果はロビーでアナウンス（5位までの6人にロシア人が3人入賞）。やはりロシア勢は強かった!!

世界に音楽を発信できる人を育てる

今は世界の情報がパソコンで即座に手に入る時代です。すでにコンクールの結果とすべての演奏もインターネット上で公開されていますが、実際に「見て聴く」事は、単に知識を得る以上に大きな意味があると、今回の海外研修で実感できました。

私は日頃、ピアノ演奏の仕事を目指す大学生の指導に当たる毎日ですが、今回の経験をきっかけとして、新たな目標とエネルギー――世界に音楽を発信できる人を育てる――を得た事が大きな収穫だったと言えるでしょう。今後、学生達とともに頑張りたいと思います。

〈第63回例会〉

レクチャー・コンサート

21 世紀のショパン像 ～新書簡集出版を祝って～

安田 文子

ポーランドで刊行が始まった新書簡全集の日本語訳（ショパン全書簡：1816-1831年：ポーランド時代、岩波書店、2012）の出版を記念して、2012 年11月17日に北海道大学情報教育館で第 63 回例会レクチャー・コンサートを行いました。

ショパンの命日が 10 月 17 日であること、そして北海道ポーランド文化協会の初代副会長で、日本におけるショパンのピアノ教育の草分けであり、私の恩師でもある遠藤道子先生が 2011 年 11 月 24 日に亡くなられて約1年経つことから、追悼の意味を込めて 11 月 17 日にレクチャー・コンサートを行うことになりました。音楽評論家、ショパン研究の第一人者である三浦洋先生=写真右下=がお話をされ、その内容にちなんだショパンの曲を坂田朋優さん、高橋健一郎さんと私の3人で演奏しました。

新書簡集はポーランド語原文から訳された初めての日本語版で、全 700 ページを超し、ショパンをとりまく人物、生活環境、政治的・社会的・文化的背景に関する詳細な注釈がぎっしりと書き込まれていて、その内容の充実ぶりは驚くばかりです。

第1部：21 世紀のショパン像～全書簡集新訳の意義、正しい表記への修正、ショパンが書いた「シャファルニャ通信」に関する新解釈などについて～

今まであったシドフ版やヘドリー版は、不正確な記述があり、量も不十分でした。新書簡集は完全で厳密な校訂のもとに出版され、ポーランド語から日本語に直接翻訳されていて、ようやく本来の意味のショパン像が築かれるきっかけになると説明されました。

また新書簡集では、ポーランド語の発音に忠実にカタカナ表記がされています。「マズルカ」が「マズレク」に、あるいはショパンが書いたところだけ「ミツキェヴィチ」が「ミチキェヴィチ」となっています。これは間違いではなく、ミツキェヴィチの故郷のリトアニアのノヴォグルデク地方ではこう綴るのだそうです。

三浦洋さんのお話

ショパンは少年時代、ポーランド北部のシャファルニャ村で夏休みを過ごし、ワルシャワにいる両親に「シャファルニャ通信」という題名を付けて新聞風の手紙を送っています。その紙面は国内ニュースと国外ニュースに分けられていて、これはポーランド三分割の結果、実際にシャファルニャ村の近くをロシア領とプロイセン領の国境線が走っており、ショパンもこの国境線を越えて往来していたことに関連しているそうです。私も留学中シャファルニャ村に行ったことがありますが、のどかな田園風景が広がっていて、土着的というか、土の匂いのする風情でした。ホテルもないので農家に泊めていただき、朝はたくさんのニワトリの鳴き声で起きたことが印象に残っています。多分ショパンが過ごした当時の村の様子とほとんど変わらないのではないかと思います。

そして坂田朋優さんが、マズルカ第 13 番イ短調 Op.17-4、ワルツ第 13 番変ニ長調 Op.70-3、ポロネーズ ト短調を非常に美しく、かつ知的に弾いてくださいました。

第2部：イタリアの影～ショパンが近代教育で受けた多文化的な影響、コンスタンチアのこと、ショパンの教師同士の確執、「芸術」という言葉とショパンの関係などについて～

ショパンは学生時代イタリア語を勉強していて、手紙の中でも時々冗談のように使っており、イタリア語との結びつきは濃かったようです。当時、19 世紀前半のヨーロッパで流行していたロッシーニやベリーニのオペラがショパンの一番お気に入りの音楽でした。それがショパンの作曲技法に多大な影響を与えています。ベルカント唱法やコロラトゥーラ唱法というオペラの歌い方をそのままピアノ音楽のメロディーに取り入れています。

私は、コロラトゥーラ唱法を思わせる美しいメロディーでできているノクターン第2番変ホ長調 Op.9-2 と、うっとりするような息の長い美しいメロディーでオペラとの類似性が指摘されるピアノ協奏曲第2番ヘ短調 Op.21 第2楽章を弾かせていただきました。ピアノ協奏曲第2番は、1996 年に札幌でポーランド国立放送交響楽団と初めて弾きました。遠藤道子先生に「大変な曲だけど、がんばりなさい」と励ましていただいたことを思い出します。今回はピアノ独奏版でオーケストラの部分もピアノで弾きました。いろいろな方の編曲がありますが、オーケストラの雰囲気がよくでているアール・ワイルド版を選びました。

第3部：バラードの誕生～ミツキェヴィチやヴィトフィツキなどポーランドの詩人たちがショパンに与えた影響、バラード第1番がその後のショパンの作品に与えた影響を考える～

音楽史上バラードという分野を初めて作ったのはショパンで、どうして文学のジャンルに音楽を取り入れようとしたのかという疑問に、新書簡集が多くのヒントを与えてくれます。まず歴史的背景に原因があり、18 世紀の後半、ヨーロッパで民族主義運動が起こって、自分たちの民族の文化のバラードを復活させようという動きがありました。ちょうどショパンの時代、1820 年代のポーランドにもバラードブームがあり、ミツキェヴィチとヴィトフィツキという2人の優れたバラード詩人が登場しました。特にポーランド最大の詩人ミツキェヴィチはショパンとの関わりが深く、ショパンはミツキェヴィチについて、1827 年1月8日と3月 12 日の友人宛の手紙で書いています。バラード1番と同じころに作ったポロネーズ第1番、ノクターン第7番は作風、音楽の作り方がバラードに似ていて、叙事的で物語を感じさせる作品になっています。バラード1番は「幻想曲」などのその後の作品にも影響を与えていくのです。

そして高橋健一郎さん=写真下=が、バラード第1番ト短調 Op.23 を力強く、かつ美しく弾いてくださいました。バラードはポロネーズやマズルカではないのに、ポーランド民族的な感じがするのが印象的でした。やはりショパンの音楽の一番の根幹にあるのはポーランドなのだと思います。

三浦先生が編者のスコヴロン先生に尋ねたところ、新書簡集の第2巻は 2013 年末、第3巻は 2020 年に出版の予定だそうです。ショパンのナショナルエディション、いわゆるエキエル版が出版されたときもショパン研究の進歩に驚いたものですが、新書簡集のおかげでショパンの実像を知ることができることに期待はますます膨らみます。三浦先生のショパンの深い理解と洞察力に裏付けられた、機知に富んだお話をもっと聴きたいので、ぜひ次の機会を待ちたいと思います。

高橋健一郎さんの演奏

〈第 64 回例会〉

ジャズ de ポランスキー

ポーランドが生んだ鬼才「ロマン・ポランスキー」の傑作短編映画＆ジャズ

冒険の価値＋赤字＝大満足

実行委員長　佐光 伸一

Sza/Za〔シャ/ザ〕（パヴェウ・シャムブルスキ&パトルィク・ザクロツキ）は、1999 年以来ワルシャワの音楽シーンとインディーズ系芸術メディアで活躍する、音楽家、即興演奏家、文化情報発信者。映画上映のため、クシシュトフ・コメダ（1931−69）の作品にインスピレーションを受けてオリジナルの音楽サウンドトラックを作った。

「無声映画に合わせて即興で音楽をつけるジャズグループ『シャザ』のコンサートを札幌でもやりませんか」とポーランド広報文化センターから打診されたのが8月。初めは不可能と思ったイベントも、映サと北大ジャズ研、そしてアーティストの宿を提供してくれた会員などの協力で、急きょ実現することとなった。

一番大きなハードルは音響機材だった。会場は映画館であってライブハウスではない。アーティスト側から届いた詳細な機材リストはアンプの種類だけでなくスピーカーのメーカーまで指定してあり、専門業者に外注すれば大赤字だろう。私も少しは音楽をやるので自前と借用の機材で会場の音響テストをしたが、結果は「不安」。札幌中のレンタル業者を探したら、普段はロックコンサートを手掛けているスタジオが格安で引き受けてくれた。

当日もう一つ問題が起きた。二人は悪天候の合間に運良く新千歳に着いたが、クラリネットのパヴェウさんは飛行機酔いと時差ぼけでダウン。私の車の中で死んだように寝入ってしまった。それでもリハーサル開始とともに復活したのはさすがプロ。彼らは楽器のほか数十種類の音響機材を持ち込み、スタジオが用意したスピーカーやミキサーと微妙な調整をしていく。彼らの細かなリクエストに応え、オペレーターさんが音作りをする、素人には不可能な、プロの業を見せてもらった。当初予算に外注費はなく最後まで迷ったが、本当に頼んで良かった。

コンサートでは、彼らは上映するそれぞれのポランスキー映画について「この作品は友情と犠牲に関する物語だ。両方とも人生で手に入れるのは、とっても難しいね」というような簡単な解説を英語で話してから演奏した。二人から「通訳抜きで」と言われていたのだが、お客さんにはどうだったろうか。演奏は想像以上に複雑。映画音楽を入れるだけでなく、すべての効果音を楽器と声で表現するのだ。例えば波の音を声で模倣し、それを特殊な機材で増幅し反復、そこにシーンに合った音楽を被せていく。20 世紀初頭の無声映画のアイディアを基にはしているが、彼らは 21 世紀のアコースティックでハイテクなストリート・ミュジシャンといった形容がぴったりな気がする。彼らの醸し出すアングラな雰囲気と会場のライブ感。自分がポーランドにいるような錯覚を覚えるほどだった。シャザの二人も大満足。「とても知性の溢れる観客で、深い部分で理解してくれていることを身体で感じることが出来た。いい思い出になった」と筆者に語ってくれた。

会場隣りのハグマートがロビーでアルコールと軽食を出張販売。上映中の客席も真っ暗にせず出入り自由、ジャズライブの雰囲気を楽しんでもらう工夫だ。ワインとジャズとポランスキーはピッタリで、お客さんの盛り上がり方もいつもの例会とは違った。「今までの自分の映画という当たり前を 180 度違う感覚で観られて新しい発見でした。また観たい」というお客様からの声も寄せられた。入場者数約 100 名で赤字決算となったのは残念で申し訳ない。

ジャズライブは初めてだったが、今後は企画の内容に応じて周知チャンネルを増やしていく努力も必要だ。昨年のポーランド映画祭では初めて日本語字幕を付けた。今回はジャズ・コンサートとのコラボ。挑戦の1年だった。

Sza/Za〔シャ/ザ〕2012.12.4
札幌プラザ２・５にて

北大クラーク会館のパイプオルガンについて

金多景（キム・ダギョン）

北海道大学クラーク会館講堂には、北海道で2番目に設置されたパイプオルガンがあります。パイプが 1556 本、ストップ数が 24 で、現在も道内では有数の規模を誇る楽器です。特に国立総合大学でパイプオルガンを所有しているのは珍しいです。

北大にパイプオルガンが設置されたのは約 50 年前のことです。北大の創基 80 周年のとき、学生のための福利厚生施設（現・クラーク会館）が設立されました。当時、卒業生等に募金を呼びかけ、北大創基 80 周年記念会館建設期成会からの寄贈の形でクラーク会館へのパイプオルガンの設置が実現しました。ドイツ・ボンのヨハネス・クライス社で3年余かけて製造されたこのオルガンは、1962 年ハンブルク港から小樽港への船旅を経て北大に到着し、1966 年5月末に組立と整音が完了しました。

このパイプオルガンを用いて、大学主催で内外の著名なオルガニストを招いた演奏会や、学生向けの特別講義《全学教育科目「パイプオルガンとその音楽」》などが行われており、普段接する機会の少ないパイプオルガンという楽器により親しみを感じていただくきっかけとなっています。

カチョルさんと筆者。
北大パイプオルガンの前で

1990 年代初め、一時中断していた大学主催の定期演奏会が再開されるなど、北大のオルガンをより活用しようという声が起こり、それをきっかけに 1994 年5月に北海道大学パイプオルガン研究会が設立されました。現在、研究会ではクラシック音楽はもちろん、その他のジャンルの曲も演奏することによって、パイプオルガンという楽器のさまざまな魅力を引き出そうとしています。また、公認学生団体として定期演奏会を春と秋、年に2回主催しています。

今回、*Kitara* 専属オルガニストのカチョルさんのリサイタルがクラーク会館で行われることとなり、多くの方々に北大のオルガンの音色を披露できますことを大変嬉しく思っています。パイプオルガンがより親しみのある楽器になることを期待しています。

（北海道大学パイプオルガン研究会　会長）

〈第 67 回例会〉

マリア・マグダレナ・カチョル オルガンリサイタル with 松井亜樹

～オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽～

第 15 代 *Kitara*
専属オルガニスト
カチョルさん

2013 年8月16 日に北海道大学クラーク会館講堂で、本会と北海道大学パイプオルガン研究会、日本アレンスキー協会が協力し、札幌コンサートホール *Kitara* 専属オルガニストのマリア・マグダレナ・カチョルさん（ポーランド出身）と声楽家の松井亜樹さんを迎えて講演と演奏会を催し、多数の聴衆がすばらしい演奏と半世紀近い歴史をもつクラーク会館パイプオルガンの美しい響きを堪能しました。

カチョルさんの音楽

川染　雅嗣

8月 17 日に函館本線は脱線事故が起こり不通になった。その惨状をテレビで観て戦慄した。もし私の札幌行が一日遅れていたら、カチョルさんの演奏を一生聴かなかったかもしれない。そう思うと、偶然とはいえそこには見えない力が働いているに違いないと思わざるを得ない。

8月 13 日に函館入りした私は、キャンプディレクターを務めているイカール国際ミュージックキャンプで子供たちに室内楽を指導し、16 日の朝の特急で札幌に移動した。函館のキャンプは今年で3回目だ

が、こんなに湿っぽく暑い函館は初めてであった。札幌も似たような気候で、東京とさほど変わらないくらいである。会場のクラーク会館まで歩いて行く間に、汗だくになってしまった。

クラーク会館にはいささか思い出がある。札幌北高に通っていた私は、昼休みに自転車を飛ばしてクラーク会館まで行き、ご飯を食べて午後の授業に間に合うように帰ってくるというバカな遊びに熱中していたときがある。何度か試したがかなりの強行軍である。その時の思い出として残っているのは、クラーク会館の料理がひどく不味かったということくらいである。ましてやそこにパイプオルガンがあることは、今回の企画で初めて知ったくらいである。

当日会場は多くの聴衆で埋め尽くされ、正直札幌の音楽ファンの見識の高さに驚いた。普段日本アレンスキー協会のイベントでの観客動員に苦労していることを思うと、一体どんな人たちが聴きに来たのかと不思議な気持ちになった。

この日の会は前半が講演、後半が演奏である。やがて長身のポーランド美女が登場した。彼女がその日の主役のマリア・マグダレナ・カチョルさんである。ポーランドのオルガン音楽についての説明がひとしきり終ると、演奏に入った。バッハのトッカータとフーガ ニ短調で始まった演奏は、様々な時代の作品を網羅した大変興味深いものであった。カチョルさんの演奏はまさしく正統的なもので、無駄な虚飾を一切排除した、極めて簡潔かつ充分な彼女そのものとでもいうべき清廉なものだった。大向こうの受けを狙った軽佻浮薄な演奏が蔓延する現代にあって、彼女の音楽は貴重な存在である。

松井亜樹さん（左）と
カチョルさん

終演後はカチョルさんを囲んで食事会があり、共催団体の代表として私も出席させていただいた。それのみならず、10 年ほど使っていなかったポーランド語で乾杯のご挨拶までさせて貰い、その錆びついたポーランド語に我ながら愕然としたものである。話題は多方面に及び、しばらくぶりで知的な時間を過ごすことができた。*Kitara* のオルガニストの任期は1年ということだが、それはいかにも短いと言わざるを得ない。日本での生活に慣れたころには交代である。今回最も心残りなのは、彼女の演奏を一度も *Kitara* で聴いたことがないことである。ポーランドに帰国してからも度々日本を訪れ、演奏して欲しい。その時は是非共 *Kitara* で聴いてみたいものである。

最後に余談だが、ショパンは少年時代にワルシャワの教会でオルガンを弾いていたと伝えられている。ショパンのあの徹底したレガート奏法とそれを支える複雑な指使いは、実はこのオルガン演奏の体験から生まれたものではないかとも言われる。真偽のほどは確かではないが、充分に考えられることである。そんなことをふと思い出した。カチョルさんの益々の活躍を切に祈念し、この文章を締めくくりたい。

（かわそめ・まさし　日本アレンスキー協会会長）

ポーランドにおけるオルガン音楽

お話（要旨）　マリア・マグダレナ・カチョル

ポーランド音楽の歴史

ポーランドは、966 年にキリスト教を国教として以来、今日までローマ教会の影響下にあり、音楽の分野でも西ヨーロッパ文化の影響は多大でした。ポーランドの中世の音楽作品は、16–17 世紀に頻発したモルドヴァ、ロシア、スウェーデンなどとの戦争や軍事衝突の中で大部分が失われました。

現存の最古のオルガンとリュートのタブラチュア譜（五線譜だけでなくアルファベットなどを利用した記譜システム）から、ポーランドで活躍した作曲家が優秀な技術をもち、ヨーロッパ音楽の影響下にあったことがわかります。その中にはクラクフのミコワイ、シャモトゥウィのヴァツワフ、少し後代のアダム・ヤジェンプスキ、マルチン・ミェルチェフスキ（別名ミコワイ・ジェレンスキ）などがいます。15 世紀半ばから、楽器や楽譜などを収集し利用する修道院付属機関のおかげで音楽は著しく発展しました。その後ワルシャワでは、1625 年に初めてオペラが制作され、1766 年にはポーランド最初の劇場が創立されました。

音楽の発展に寄与し世界的に名を残した優れた音楽家としては、モーツァルトが「アンダンテ」K.470 を捧げたことでも知られるクラクフのヴァヴェル城大聖堂のバイオリン奏者フェリックス・ヤニエヴィチ、ワルシャワ音楽院を設立しフレデリック・ショパンの最初の師でもあったユゼフ・エルスネル、『音楽週報』誌を発行した作曲家カロル・クルピンスキ、政治家であり音楽家でありポーランド国歌の作曲

者に擬せられたミハウ・クレオファス・オギンスキや、ポーランド・オペラの創始者スタニスワフ・モニューシュコ、独立回復後のポーランドで首相と外務大臣を務めた作曲家イグナツィ・ヤン・パデレフスキ（ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で初めて上演されたポーランド・オペラの作者）などが挙げられます。ポーランド民謡の魅力を作品の中で利用した作曲家には、カロル・シマノフスキやフェリクス・ノヴォヴィエイスキがいます。20 世紀後半のポーランド音楽は、ヴィトルト・ルトスワフスキ、クシシュトフ・ペンデレツキ、ヘンリク・グレツキなど世界的に有名な作曲家の強い影響の下にあり、彼らも作品でポーランド民謡を何度も利用しています。

ポーランドのオルガン

ポーランドに存在したオルガンに関する最初の記述はカジミェシュ2世の治世（1177–94）にさかのぼり、彼の宮廷には小さなパイプオルガンがあったそうです。中世には、修道院での儀式のために小さなオルガンが製作されました。たとえばサンドミェシュのドミニコ会のオルガンや、チシェブニッツァのシトー会には 1200 年ごろにはオルガンがあったといわれます。それらの楽器は何度も修理され、それについて多くの情報が集められていて、そこから 14 世紀以降のオルガン製作者の名を知ることができますが、初期のオルガンは大きな損傷を受け修復されていることが多く、普通は残っている古い楽器のいろいろな痕跡は入念に消し去られています。

15 世紀には、トルン、クラクフ、グダンスク、ヴィリニュス、リュボフなどの大都市には、いくつかの大きなオルガンや、多くの小さなオルガンがあり、それらの都市の経済力を物語っています。残された文書から、オルガンを2つももつ聖マリア教会があるクラクフのような都市がいくつもあったことがわかります。ポーランドでもっとも有名なオルガン製作家としてはスタニスワフ・ゼルニク、ミコワイ・ザウェンツキが挙げられます。後者はドイツのフレイブルグの大聖堂をはじめ、ポーランド国外でもオルガンを製作しました。

17 世紀以前の大オルガンは、当時の資料や作品によれば、手鍵盤2つとペダル1つをそなえ、いわゆるポジティフや1つの鍵盤につながったパイプが、現代のように楽器の内部にあるのではなく、聖歌隊席の手すりに吊り下げられていたことが特徴です。裕福な家庭では、「ポジティフ」や「レガール」と呼ばれた、ペダルがなく手鍵盤が1つ、音色を変えるためのストップが1つ、あるいは数個しかない小さなオルガンが人気がありました。

17 世紀には、ドイツで教育を受けたポーランド人によってオルガン製作工房が発達しました。イェンジェユフやオルクシュでは、彼らの製作したオルガンの完成度の高さに驚かされます。その音色はしばしば後代の影響により変えられています。オルクシュのオルガンは 1612 年製で、ヤン・フンメルが製作したもっとも古い楽器の一つです。オルガンケースはルネサンス様式で、元の状態では 23 のストップと手鍵盤2つとペダルがあり、現在はストップ数は 29 です。

よく知られた価値の高い歴史遺産的オルガンとしては、1620 年にカジミェシュ・ドールヌィで作られた素晴らしい楽器があります。製作予算の不足のためか、トランペットのようないわゆるリード管の音がないという興味深い音色の特徴があります。オルガンボックスはオリジナルのままで、ポーランドと西ヨーロッパで発達した素晴らしい手工業の業がみられます。

ニトロフスキ一族の名は、17 世紀のオルガン製作の歴史の中でもっとも重要でしょう。この時期の現存するもっとも美しいオルガンは、ニトロフスキ家三代のオルガン製作者の手によるものです。特に重要なのはサンドミェシュのコレギウム教会のオルガンで、製作には 1694–98 年まで4年かかり、当時のヨーロッパでは最大のおよそ 40 のストップがあります。マッテゾンやアードルングなどのすぐれた音楽理論家も著書でこの楽器に触れています。フロムボルクやペルプリンの大聖堂にあるオルガンも、ニトロフスキの残した傑作です。レジャイスクの大聖堂にも、製作に 13 年かかった素晴らしいオルガンがあります。みごとな装飾の施されたバロック様式のオルガンボックスは、ポーランドでもっとも美しいものの一つです。

先にも述べたように、素晴らしいオルガンは、資金の豊富な修道院付属の教会で製作されました。イェンジェユフのシトー会の教会にもそうした素晴らしい例があります。全ヨーロッパでよく知られたオルガン製作者カスパリーニ家は、ブロツワフとプウォツクに素晴らしい楽器をいくつか残しています。有名な、グダンスクのオリヴァのオルガンは、1763–88 年にヤン・ブルフ・オルネトが製作した、現存する中でもっとも大きく繊細な楽器の一つですが、その音色は新しい流行に合わせて何度も変えられています。

中央ヨーロッパの西側に残る楽器の調査から、当時ポーランドで作られたオルガンの様式は、他の国のオルガン製作の強い影響下にあるといえます。オルガンのストップに製作者一族の名がつけられていること以外、ポーランドに固有の特徴は一つもありません。同時期にドイツ、オランダ、フランスで作られたオルガンと比べて、ポーランドのオルガンの大きさは規範から大きく外れません。ポーランドのオルガンは大部分が中程度の大きさで、ストップ数はおよそ 35 ですが、西ヨーロッパでは、オルガンのサイズはもっと大きく、演奏を簡単にするメカニズムやリード管のストップがあります。多くの場合、それはオルガンの注文主の財政力によります。裕福な貴族の家庭では、手鍵盤が1つの小さなオルガンが用いられました。同種の楽器が、以前は小さな教会でも使われ、祝日の大きな儀式では「ポジティフオルガン」が用いられました。この種のオルガンで、現存するもっとも美しい楽器はスタールィ・ソンチの大聖堂にあります。

ロマン派の時代には、オルガンの構造や音色に多くの変化がありました。再び武力衝突によって多くの工房が失われ、オルガンは国外の会社で製作されることが多くなりました。その例としては、ウォルカー、ラデガスト、ザウアーや、ポズナンの大聖堂に素晴らしいオルガンを納めたフランスのカヴァイエ・コル社などがあります。残念ながら、このオルガンは第二次世界大戦中に爆撃で完全に破壊されました。

1945 年以降、共産主義体制の下で多くの教会が閉鎖され、オルガン製作は制限され、オルガン音楽の発展は阻害されました。　（佐光伸一　訳）

ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年 記念講演＆演奏会

「ポーランド楽派を聴く」

～ショパンとルトスワフスキ～

佐光 伸一

ポーランドの生んだ秀でた作曲家ヴィトルト・ルトスワフスキの生誕 100 周年を記念し、ルトスワフスキ研究の第一人者でワルシャワ大学のズヴィグニェフ・スコヴロン教授を迎えて、昨 2013 年 10 月 15 日に札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホールにて講演と演奏の集いを開催しました。

ルトスワフスキはポーランド国内だけでなく、世界的にも戦後の現代音楽を代表する素晴らしい作曲家ですが、札幌では知名度はあまり高くありません。お客様が集まるのかと不安でしたが、幸いスコヴロン教授は、2012 年に日本で翻訳が出版された『ショパン全書簡 1816−1831 年』(岩波書店)の編集にも関わられたショパン研究者でもあり、2012 年には東京で新書簡集について大変素晴らしい講演をされたと聞きましたので、前半はショパン書簡集をめぐるスコヴロン教授と当協会会員の三浦洋さんの対談=写真1=、後半はスコヴロン先生のルトスワフスキについての講演としました。また当協会の会員の中には素晴らしい音楽家が多数いらっしゃいますので、前半はショパン、後半はルトスワフスキの作品の演奏を加えて=写真2=、「ポーランド楽派を聴く」と銘打ったレクチャーコンサートとしました。初めて使う会場でしたが、二階天井まで吹き抜けで音響が素晴らしく、お客様との距離も近く、とても親密な雰囲気で、講演と演奏には打ってつけでした。

当日は前後半とも筆者がポーランド語から通訳をしました。当日までとても緊張しましたが、実際にお会いすると、スコヴロン先生は非常に深みのある内容を平易な言葉で情熱をもって語られ、まるで音楽に関する優れた書物の朗読を聴くようで、非常に理解し易くホッとしました。

前半はポーランド、日本を代表するショパン研究者の対談とあって、とても刺激的でした。スコヴロン先生は、ショパンの書簡の原本は紛失したものが多く非常に苦労していること、編集には現在フランスで刊行中のジョルジュ・サンド書簡集の編集方針を参考にし

写真 1 三浦氏(左)とスコヴロン氏(右)

ていることなどを語られました。三浦さんが、書簡集の編集によりスコヴロン先生のショパン像は変わりましたかと質問すると、先生は、ショパン像に変化はないが、当時の歴史・社会背景を知ることでショパンに対する理解が深まったこと、特にショパンは作曲家としては歴史上初めて近代的教育制度の恩恵を受け大学で文学や哲学などの一般教養を学んだことの重要性を強調されました。新書簡集は全3巻で、出版されたのはまだ1巻目のみですが、現在編集中の2巻目は次のショパンコンクールが行われる2015 年、3巻目はその次のショパンコンクールがある 2020 年に出版を目指しているそうです。

つづいて当協会会員の松井亜樹さんのソプラノ、高橋健一郎さんのピアノ伴奏でショパンの歌曲「いとしい人」ほか、坂田朋優さんのピアノで「バラード第3番」が演奏されました。スコヴロン先生は札幌で聴くショパン作品を堪能された様子で、イベント後に「演奏のレベルの高さに非常に感銘を受けた」とおっしゃっていました。

後半はルトスワフスキについての講演です。スコヴロン先生は、今回の日本講演旅行では、札幌以外はすべて英語原稿で、札幌のためにポーランド語に訳し直されたそうです。事前にいただいた原稿は通訳なしでも 90 分はかかる力作でしたが、後半は通訳、演奏を入れて 50 分で、話されたかったことの半分もお話しいただけず、全体の構成、時間配分など、企画には多くの反省点が残りました。

講演でスコヴロン先生は、ルトスワフスキ作品の抜粋を CD で紹介しながら、彼の創作活動の発展について解説されました。調性音楽に代わる音楽言語を探求したこと、1956 年のハンガリーにおける反共産主義運動の影響でこの時期ポーランドでも文化政策が緩和化し、それがルトスワフスキ、ペンデレツキ、グレツキなど（「ポーランド楽派」と呼ばれる）優れた音楽家を生んだこと、当時流行していた「偶然性の音楽」という理念から、ルトスワフスキは「管理された偶然性」という独自の作曲技法を生み出し、それは決められた時間の範囲内で、決められた音の高さを保ちながら、自由なリズムで演奏する手法であったことなどを、非常に印象深く話されました。

ルトスワフスキの作品の演奏では、前半に引き続き松井亜樹さんと高橋健一郎さんがユリアン・トゥヴィムの詩による歌曲を2曲演奏しました。また当協会会員、昭和音楽大学教授でピアニストの川染雅嗣さんが東京から駆けつけ「ポーランドの民謡風メロディ」から演奏を聞かせてくださいました。川染先生はポーランド留学中にルトスワフスキ自身の演奏を聴かれたことがあるそうです。本場で研鑽を積まれた先生の、ポーランド音楽やルトスワフスキに対する深い理解に基づいた演奏に会場全体が魅了されました。最後に会場の札幌大谷大学のピアノ科主任教授で、当協会会員のピアニスト谷本聡子さんとクラリネットの菊地秀夫さんが「舞踏前奏曲」を演奏しました。複雑なリズムの難曲を、曲の魅力を最大限に伝えながら見事に演奏しきる熱演でした。

講演の最後にスコヴロン先生は、ルトスワフスキを含め現代音楽を私たちが理解する方法について非常に印象深い指摘をされました。現代音楽は外国語の学習のようなもので、最初は何の意味も持たない音声の流れにしか聞こえないが、文法や語彙を習得するにつれ、徐々に意味が理解できるようになるというのです。現代音楽も、その作曲技法、構成などの知識を得て接してはじめて理解に達すると強調されました。聴き手の側にも音楽を受け容れるための準備が必要であるという考えには非常に共感できました。

ルトスワフスキというなじみの薄い作曲家に関するイベントにもかかわらず、当日は小さな会場に満員のお客様が足を運んでくださいました。ご来場いただいた方々、スコヴロン先生、三浦先生、演奏者の皆さま、当日お手伝いいただいたスタッフの皆さん、さらにスコヴロン教授の招聘にご支援をいただいたポーランド広報文化センターには感謝の念でいっぱいです。本当にありがとうございました。

（さみつ・しんいち「W.ルトスワフスキ生誕100 周年記念講演＆演奏会」実行委員）

写真２（左から）川染雅嗣さん、高橋健一郎さん、菊地秀夫さん、坂田朋優さん、谷本聡子さん、松井亜樹さん

北海道ポーランド文化協会の演奏会等一覧

☆2003 年以前　★2004 年以降のイベント　(☆は資料の残るもののみ記載)　　(FC)=(フレデリック・ショパン)の略

☆協会設立記念総会&祝賀会(1987.10.2, 京王プラザホテル札幌 地階インドアプラザ)ピアノ演奏:遠藤道子, 大竹貞, 中村玲子, 薄井豊美, 伊東美枝子, 中村美由紀, ジュレミー・ウィリアムス, 野谷恵;ポーランド民族舞踊:札幌フォークダンスクラブ, 参加者 104 人

☆第2回総会&創立1周年記念パーティー(1988.10.24, すみれホテル)ピアノ演奏:遠藤江里子, 黒河好子, 薄井豊美・渡辺卓

☆第3回総会&懇親会(1989.10.16, すみれホテル)ピアノ演奏:横路朋子, 真光孝美

☆創立2周年記念エリザベータ・ステファンスカ・ハープシコード・リサイタル〈第9回例会〉(1989.11.6, ザ・ルーテルホール)

☆第4回総会&創立3周年記念コンサート(1990.10.28, 札幌市教育文化会館小ホール)

☆第5回総会&懇親会(1991.11.8, すみれホテル)ピアノ演奏:高島真知子, 水谷澄子, 大竹貞

☆第6回総会&懇親会(1992.11.9, すみれホテル)ピアノ演奏:田口綾子

☆ピアノジョイントコンサート《ポーランドの代表的作曲家の作品》〈第 20 回例会〉(1993.8.20, ザ・ルーテルホール)ピアノ演奏:高岡美保, 宮木恵子, 小野由惠, 入場料 2,500 円

☆第7回総会&懇親会(1993.10.12, KKR ホテル札幌)ピアノ演奏:青山淳子

☆第8回総会&遠藤道子先生の北海道文化賞ご受賞を祝う会(1994.11.29, すみれホテル)ピアノ演奏:本田真紀子

☆第9回総会&懇親会(1995.10.11, すみれホテル)ピアノ演奏:塚原恵美子

☆創立 10 周年記念コンサート《ポーランド音楽の夕べ》(1996.11.8, カデル2・7ホール)ピアノ演奏:渡辺卓, ウィリアムス美由紀, 高岡美保, 田口綾子, 塚原邦夫, 水田香, 小野由惠, 本田真紀子, 國谷聖香, 大和田りえ子, 片寄ますみ, 高島真知子, 水谷澄子, 遠藤江里子, 名取百合子, 薄井豊美, 横路朋子, 朗読:サヨンチ・マウゴジャータ, 入場料 2,000 円, 入場者 520 人

☆第 10 回総会&懇親会(1996.11.28, すみれホテル)ピアノ演奏:明上山貴代

☆第 11 回総会&懇親会(1997.11.28, すみれホテル)ピアノ演奏:谷本聡子

☆第 13 回総会&懇親会(1999.10.15, すみれホテル)ピアノ演奏:片寄ますみ, 田口綾子, 水田香

☆第 14 回総会&懇親会(2000.10.13, すみれホテル)ピアノ演奏:國谷聖香, 塚原恵美子

☆ピアノコンサート《ポーランド時代のショパンとその作品》〈第 45 回例会〉2002.9.28, 北海道立近代美術館エントランスホール, 入場無料, 参加者約 210 人, 〈共催〉北海道立近代美術館&本協会

〈お話〉三浦洋
ノクターン op.9-1, マズルカ op.71, ワルツ op.69-2/Pf 安藤むつみ
ワルツ op.70-3, ロンド op.1/Pf 田口綾子
ノクターン op.9-2, ポロネーズ op.71-3/Pf 國谷聖香
ノクターン op.15-2, ワルツ op.18, エチュード op.10-12/Pf 塚原恵美子

★ピアノコンサート《フランス時代のショパンとその作品》〈第 47 回例会〉2004.5.1(土)15:00～, 北海道立近代美術館エントランスホール, 入場無料, 参加者約 150 人, 〈共催〉北海道立近代美術館&本協会
〈お話〉三浦洋
プレリュード op.28-7・8・9・10・11, タランテラ op.43/Pf 小林美保
プレリュード op.45, スケルツォ op.54/Pf 片寄ますみ
幻想即興曲 op.66, マズルカ op.67-3, マズルカ op.33-2, バラード op.47/Pf ウィリアムス美由紀

★ピアノコンサート《秋の午後のショパンコンサート》〈第 50-2 回例会〉2006.11.4(土)15:00～, 井関楽器ホール, 入場料 1,000 円, 入場者約 80 人
〈お話〉三浦洋
ノクターン op.62-2, スケルツォ第1番 op.20/Pf 高橋健一郎
ファンタジーop.49/Pf 安藤むつみ
ノクターン遺作, マズルカ op.24-1, マズルカ op.24-3, ワルツ op.69-1/Pf 渡辺卓

★創立 20 周年記念ピアノコンサート《ショパンからバツェヴィチまで》, 2008.5.17(土)13:30～, 札幌コンサートホール *Kitara* 小ホール, 入場料 2,000 円, 入場者 365 人
ノクターン op.15-2, ワルツ op.34-3(FC)Pf 小林美保
ノクターン op.27-2(FC)Pf ウィリアムス美由紀
プレリュード op.45, ワルツ op.64-2(FC)Pf 片寄ますみ
ポロネーズ op.40-1「軍隊」, アンプロムプチュ op.51(FC)Pf 安藤むつみ
コントルダンス, ワルツ op.70-2, ワルツ op.69-1「告別」(FC)Pf 渡辺卓
変奏曲(FC)Primo 塚原恵美子&Secondo 塚原邦夫
〈朗読〉「コンラート・ヴァーレンロット」第4章「祝宴」の「詩人の歌」より(アダム・ミツキェヴィチ)パヴェウ・ディヴァワ, 「フレデリク・ショパン追悼」(ツィプリアン・カミル・ノルヴィト)ヨアンナ・ディヴァワ
バラード op.23(FC)Pf 水田香
子どものための組曲, スケルツォ(G.バツェヴィチ)Pf 田口綾子
変奏曲 op.3(K.シマノフスキ)Pf 高橋健一郎
カプリス, マズルカ(M.モシュコフスキ)IPf 高島真知子&IIPf 薄井豊美
ヨハン・シュトラウスのワルツによる幻想曲(A.タンスマン)IPf 名取百合子&IIPf 横路朋子

★ピアノコンサート《ショパン, リャードフなどを中心に》〈本会主催〉2009.5.29(金)18:30～, 札幌サンプラザ

コンサートホール，入場料 2,000 円
1.「ショパンの舞曲」〈お話〉三浦洋
ポロネーズ op.71-2，ワルツ op.69-2，ワルツ遺作（FC）Pf 木曽育恵
ワルツ遺作，マズルカ op.6-4，ポロネーズ遺作（FC）Pf 石澤麻里
Ⅱ.「悲しみの川」op.74-3，「いとしい人」op.74-12 他（FC）Sop 松井亜樹&Pf 高橋健一郎
バラード No.4 op.52（FC）Pf 小崎ゆかり
ポーランド民謡の主題による変奏曲（A.リャードフ）Pf 川本彰子
ノクターン op.62-2 他（FC）Pf 片寄ますみ
幻想ポロネーズ op.61（FC）Pf 安藤むつみ
Ⅲ. ロンド op.73（FC）IPf 高島真知子&IIPf 薄井豊美
ハンガリー狂詩曲 No.2（F.リスト）IPf 本田真紀子&IIPf 名取百合子

★ピアノコンサート“Chopin in Hokkaido”～ショパン生誕 200 年を記念して～〈共催〉駐日ポーランド共和国大使館&本協会，2010.2.6（土）13:30～，ザ・ルーテルホール，入場無料，参加者約 200 人，ヤドヴィガ・ロドヴィッチ駐日ポーランド共和国大使・上田文雄札幌市長来場
ワルツ op.70-2，幻想即興曲 op.66（FC）Pf 木曽育恵
「悲しみの川」，「美しき若者」，「二人の死」（FC）Sop 松井亜樹&Pf 木村悠子
オペラ「ルサルカ」より「月に寄せる歌」（ドヴォルザーク），ポーランド舞曲 op.55 Ⅰ マズルカ・Ⅱ マズルカ・Ⅲ ポロネーズ・Ⅳ クラコヴィアーク（モシュコフスキ）Primo 高島真知子&Secondo 名取百合子
ノクターン op.15-1，ノクターン op.27-2，幻想ポロネーズ op.61，マズルカ op.6-2・op.6-3，スケルツォ op.20（FC）Pf 坂田朋優

★《ショパン生誕 200 年記念》コンサート〈本会主催〉2010.6.18（金）18:30～，札幌サンプラザコンサートホール，入場料 2,000 円，入場者約 500 人
1. ソロ
ボレロ op.19（FC）Pf 石澤麻里
スケルツォ No.2 op.31（FC）Pf 上村梓
バラード No.1 op.23（FC）Pf 木曽育恵
バラード No.3 op.47（FC）Pf 安藤むつみ
Ⅱ. デュオ
ソナタ op.35 第 1・3・4 楽章（FC=C.サン=サーンス）IPf 薄井豊美&IIPf 上田弥美
大都会〈第1楽章：街角・第2楽章：労働者の町・第3楽章：ダンシング〉（A.タンスマン）IPf ウィリアムス美由紀&IIPf 片寄ますみ
ワルソー協奏曲（R.アディンセル）IPf 名取百合子&IIPf 高島真知子
パガニーニの主題による変奏曲（W.ルトスワフスキ）IPf 本田真紀子&IIPf 田口綾子
Ⅲ. ポーランド国歌，波蘭懐古，森へいきましょう，上を向いて歩こう，北海道賛歌メドレー（時計台の鐘，知床旅情，虹と雪のバラード，雪の降る街を，この青空を，宗谷岬）男声合唱団「ススキーノ」，指揮：長内勲&Pf 小泉香織

★ピアノコンサート《ショパン，パデレフスキ，モシュコフスキの作品を中心に》〈本会主催〉2011.6.4（土）18:30～，札幌サンプラザコンサートホール，入場料 2,000 円，入場者約 100 人，来賓：駐日ポーランド共和国大使館ドミニカ・ヤキモヴィチ=ブウァシュチク領事
I. ソロ
ノクターン No.13 op.48-1，ノクターン No.14 op.48-2（FC）Pf 石津麻里
メヌエット op.14-1（I.J.パデレフスキ），スペイン奇想曲 op.37（M.モシュコフスキ）Pf 木曽育恵
ショパンによる6つのポーランド歌曲 op.74（FC=F.リスト）Pf 川本彰子
ソナタ No.2「幻想」op.19（A.N.スクリャービン）Pf 高橋健一郎
Ⅱ. デュオ
サラバンド，パスピエ，マズルカ（M.モシュコフスキ）IPf 安藤むつみ&IIPf 名取百合子
ピアノコンチェルト op.17 第1楽章（I.J.パデレフスキ）IPf 高島真知子&IIPf 薄井豊美
ドン・ジョヴァンニの回想（F.リスト）IPf 本田真紀子&IIPf 名取百合子

★創立 25 周年記念コンサート《ショパンとロマン派の作曲家達》〈第 61 回例会〉2012.5.12（土）13:30～，札幌コンサートホール *Kitara* 小ホール，入場料 2,000 円，入場者 281 人，来賓：ポーランド広報文化センター・マルタ・カルシ次長
1. 乙女の祈り（T.バダジェフスカ），別れの曲 op.10-3，幻想即興曲 op.66（FC）Pf 安藤むつみ
二つのノクターン op.27-1，op.27-2（FC）Pf 木曽育恵
バラード第4番 op.52（FC）Pf 田口綾子
「ネマン川に」，「金魚」（S.モニューシュコ），「ツァールスコエ・セローの銅像」，「願い」，「焼かれた手紙」（C.キュイ）Sop 松井亜樹&Pf 高橋健一郎
Ⅱ. ノクターン遺作，ワルツ第5番 op.42（FC）Pf 本田真紀子
マズルカ（T.バダジェフスカ），歌劇「ハルカ」によるモニューシュコ幻想曲（C.タウジヒ）Pf 安田文子
バラード第1番 op.23（FC）Pf 高橋健一郎
ポーランド語による詩の朗読「批評家へ」（J.トゥヴィム），「トマトソースのサバ」（K.I.ガウチンスキ）S.オレヤシュ，「鳥のラジオ」他（J.トゥヴィム）M.ヤンチャレク
Ⅲ. 二台のピアノの為のソナタ op.34 第4楽章（J.ブラームス）IPf 上田弥美&IIPf 薄井豊美
メンデルスゾーンの無言歌による大演奏会用作品（F.リスト）IPf 名取百合子&IIPf 高島真知子

★第 26 回総会&創立 25 周年記念祝賀会（2012.11.3，ニューオータニイン札幌）ピアノ演奏：安田文子；歌：ヨアンナ・クンツェヴィッチ&ピアノ伴奏：安田文子

★レクチャー・コンサート《21 世紀のショパン像～新書簡集出版を祝って～》〈第 63 回例会〉2012.11.17（土），北海道大学情報教育館 3F スタジオ型多目的中講義室，入場無料，参加者約 80 人
〈お話〉三浦洋
第1部：21 世紀のショパン像

マズルカ第 13 番 op.17-4, ワルツ第 13 番 op.70-3, ポロネーズ ト短調/Pf 坂田朋優
第2部:イタリアの影
ノクターン第2番 op.9-2, ピアノ協奏曲第2番 op.21(ピアノ独奏版)第2楽章/Pf 安田文子
第3部:バラードの誕生
バラード第1番 op.23/Pf 高橋健一郎

★ジャズライブ de ポランスキー《ポーランドが生んだ鬼才「ロマン・ポランスキー」の傑作短編映画&ジャズ》〈第 64 回例会〉2012.12.4(火)19:00～, 札幌プラザ2・5, 入場料 1,500 円/学生・シニア 1,200 円, 入場者約 100 人
〈演奏〉Sza/Za〔シャ/ザ=パヴェウ・シャムブルスキとパトルィク・ザクロツキ〕)
〈共催〉本協会＆札幌映画サークル〈後援〉ポーランド広報文化センター, 北大ジャズ研究会ほか

★マリア・マグダレナ・カチョルオルガンリサイタル with 松井亜樹《オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽》〈第 67 回例会〉2013.8.16(金)14:00～, 北海道大学クラーク会館講堂, 入場無料, 参加者約 400 人
第Ⅰ部「ポーランドにおけるオルガン音楽」〈お話〉マリア・マグダレナ・カチョル
第Ⅱ部〈演奏〉M.M.カチョル(オルガン)=(K), 松井亜樹(ソプラノ)=(M)と立花雅和(フルート)=(T)
1.トッカータとフーガ BWV565(J.S.バッハ)(K)
2.即興曲集 op.36 悲歌(M.スジンスキ)(K)
3.オペラ「セルセ」より「樹々の陰で」(G.F.ヘンデル)(M&K)
4.カンタータ「楽しき狩こそわが悦び」BWV208 より「羊は安らかに草を食み」(J.S.バッハ)(M, K&T)
5.オペラ「コジ・ファン・トゥッテ」K588 より「女も 15 になったら」(W.A.モーツァルト)(M&K)
6.プレリュードとフーガ op.93(A.グラズノフ)(K)
7.ノーヴィ・ソンチの「クラリスキ修道院遺稿集」より(K)
8.「ドゥムカ」(S.モニューシュコ)(M&K)
9.「眠れ, わが子よ」op.59-5(A.アレンスキー)(M&K)
10.「夜」(A.ルビンシテイン)(M&K)
〈共催〉北海道大学パイプオルガン研究会, 本協会, 日本アレンスキー協会〈後援〉ポーランド広報文化センターほか

★ズビグニェフ・スコヴロン教授を迎えて「ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏会」《ポーランド楽派を聴く》～ショパンとルトスワフスキ〈後援事業〉2013.10.15(火)19:00～, 札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール, 入場料 1,500 円, 入場者約 80 人
第Ⅰ部〈対談〉「ショパン全書簡 1816-1831 年」をめぐって/ズビグニェフ・スコヴロン(ワルシャワ大学)&三浦洋
〈演奏〉F.ショパンの作品
「悲しみの川」op.74-3,「いとしい人」op.74-12/Sop 松井亜樹&Pf 高橋健一郎
バラード第3番 op.47/Pf 坂田朋優
第Ⅱ部〈講演〉ヴィトルト・ルトスワフスキの音楽における芸術性/ズビグニェフ・スコヴロン
〈演奏〉W.ルトスワフスキの作品
「遅れてきたウグイス」,「トララリンスキ氏について」/Sop 松井亜樹&Pf 高橋健一郎
「ピアノのための民謡風メロディー」より「ああ, 私のヤン」,「羊飼いの少女」ほか/Pf 川染雅嗣
舞踏前奏曲/菊地秀夫(クラリネット)&Pf 谷本聡子
〈主催〉「ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏会」実行委員会〈後援〉本協会、ポーランド広報文化センター、札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部、札幌市・札幌市教育委員会、日本アレンスキー協会、日本ショパン協会北海道支部、北海道作曲家協会、札幌音楽家協議会

ポーランド ＆ ニッポン歳時記

(1)

〈ポズナン市在住、ポーランド人女性、津田モニカさん〉
幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は六年前から詠みはじめる。「日常の中の水彩画」のような句を目指す。

新年や天から雪と希望(のぞみ)降る　モニカ

co za pogoda
nowy rok sypie śniegiem
i nadziejami

※ モニカさんは、POLE 78 まで「陽石」と名乗っていましたが、本書では「モニカ」に統一します。

蛇となり遊びせんとや初山河
冬凪や髭のニッカの香はいかに
影動く怪盗ルパン空に鷹
ハルビンの街なつかしや蝦夷黄砂　千代麿

〈岩見沢市在住、霜田千代麿さん〉
1992 年より作句する。伝統俳句協会員、現代俳句協会員、北海道俳句協会選者、「夏至」同人。

(本書 59, 65, 98 ページも参照)